

えどがわく ようすい 江戸川区の用水(1)

江戸川区は、河川に囲まれた低地帯にあります。西に旧中川・荒川・中川、中央に新中川、東に江戸川、区の南部には新川しんかわが東西に流れ、そして、その南には東京湾が広がっています。さらにかつては区内全域を内河川が網の目のように流れていました。



江戸時代後半、区の用水源となった小合溜井(水元公園)の現在

江戸川区の村々は、江戸時代を通じて羽生領川はにゅうりょうかわまた侯(埼玉県)から水を引く葛西用水組合(明治3年、1870年脱退)に属していました。縦横にめぐらした水路により、農業水利は楽なように思えますが、いくつかの課題がありました。一つは、低地のため水が滞留たいりゅうし水腐れを起こしました。二つ目は、二十余里(約80km)という長大な用水路でしたので、用水路の流末では用水の供給も不安定でした。三つ目は、海水が逆流して塩害の発生もありました。

江戸川区における「利水による開拓史」は同時にまた「治水による開拓史」でもありました。この事情は、江戸時代から明治へ移っても変わりませんでした。

したがって、用水の管理は、農家の死活問題であり、村人の重要な仕事の一つでした。堤防いりひや堰樋とい(水を通す樋:水門)の補強、藻刈りかわさらや川浚いは毎年の

江戸川区郷土資料室

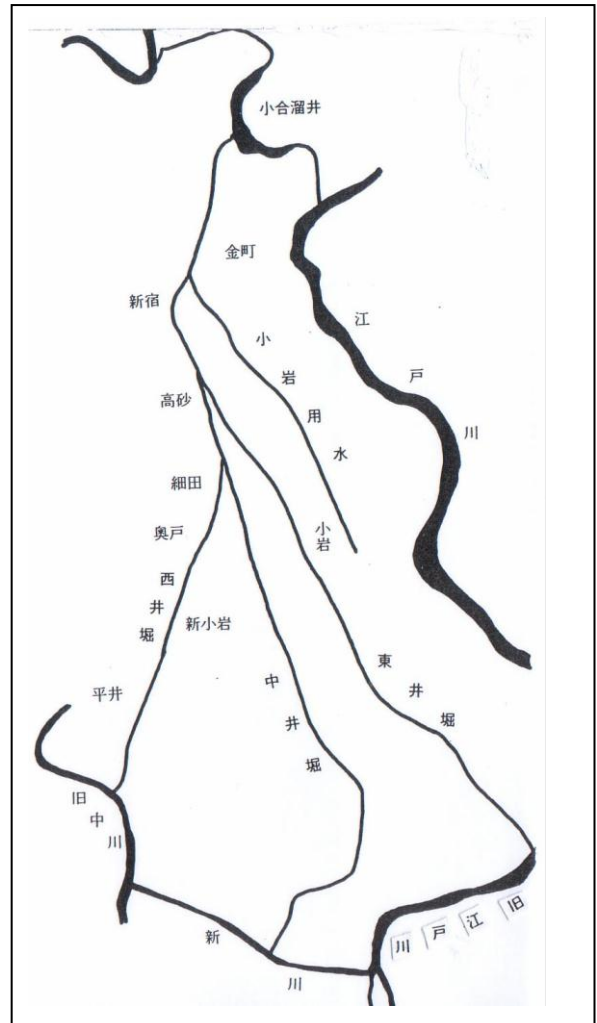
ように行われました。用水路にごみを捨てたり、魚を飼ったりすることも禁止されていました。

江戸幕府は、享保13年(1728)の水害を機に、下小合村にあった古利根川の河跡を利用し、小合溜井(現葛飾区水元公園内、溜井とは用水池のこと)をつくりました。

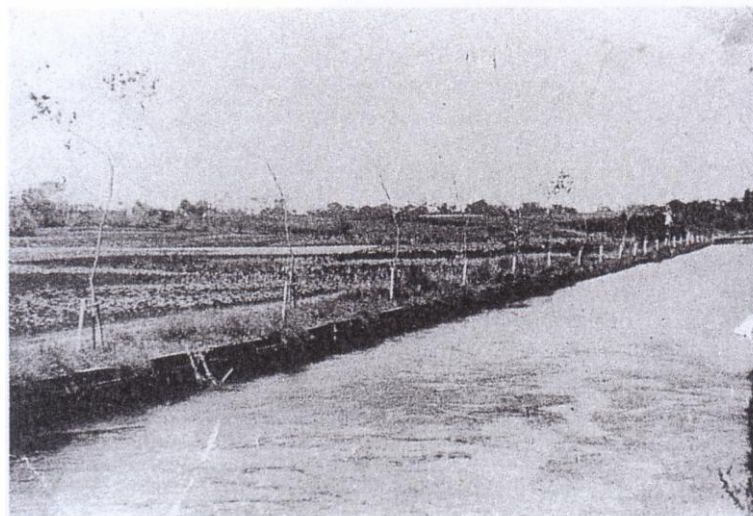
小合溜井を水源とする用水は上下之割用水(大用水あるいは大井堀、井堀とは用水路のこと)とよばれ小岩用水、東井堀、中井堀、西井堀と南に向かって振り分けられ、東葛西領の村々を潤しました。

しかし、これをもってしても安定した灌漑用水の確保は困難であったことを、区内に残る多くの古文書から読むことができます。

したがって、人びとは用水不足を境川や江戸川からの汲み水、あるいは雨水や地下水にも頼っていたようです。



用水系統図



新宿付近の上下之割用水(昭和11年頃)

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)